

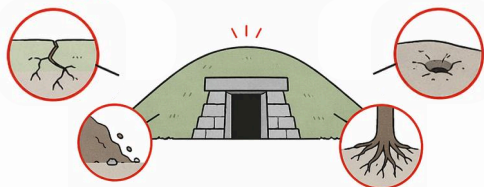
# 装飾古墳

## 環境・防災チェックシート

文化庁の「令和7年度国内装飾古墳の防災対応に関するデータベース構築支援業務」を踏まえ、装飾古墳の保存管理と防災対応に必要な考え方や手法を、現場で活用しやすい形に整理したチェックシートです。

### STEP 1

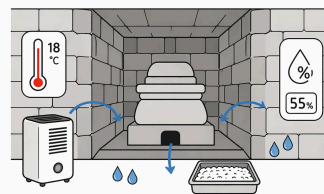
#### 施設の点検と老朽化対策（構造安定性の確保）



- 屋根・外壁・換気口・扉に劣化や隙間がない
- 雨水・外気・小動物の侵入リスクがない
- 石室内に温湿度変化や結露が生じていない
- 墳丘に亀裂・陥没・土砂流出・根の侵入がない
- 復旧・保護対策を専門家の助言を踏まえて実施している

### STEP 2

#### 石室内の温湿度管理と結露対策



- 温湿度を継続的に記録している
- 結露と乾燥の反復を防いでいる
- 扉や窓の気密性を確保している
- 日射遮蔽で蓄熱を防いでいる
- 壁画や石材の劣化兆候を確認している

### STEP 3

#### 生物被害（カビ・地衣類）・塩類・風化への対応



- 照明時間を最小限にしている
- 石室等入室時に外部から生物・有機物の持ち込みを防ぐ対策をしている
- 生物被害の発生を確認している
- 殺菌処置を慎重に実施・監視している
- 塩類風化への対策を講じている

### STEP 4

#### 日常的なモニタリング手法の実施



- 点検・モニタリング手法を標準化している
- 定期的な目視確認を実施している
- 温度・湿度などの定点観測を行っている
- 過去画像と比較して変化を確認している
- 測定機器の活用と保守管理を行っている

### STEP 5

#### 施設の点検と老朽化対策（構造安定性の確保）



- 入室人数・滞在時間を管理している
- 見学者入替時に換気・放熱時間を確保している
- 入室による熱・湿気の影響を把握している
- 敷地所有者の確認との連絡体制
- 専門家や自治体間の連絡体制を整備している
- 異常発生時に速やかに情報公開できる体制を整えている

# 日々の備えが、未来を守る

## コラム01

### リスクを「見える化」

装飾古墳は台地縁辺部や丘陵地などに築造されていることが多く、土砂災害や河川氾濫のリスクに晒されています。国土地理院の「重ねるハザードマップ」を使えば、GISソフトがなくてもブラウザ上でリスクの確認ができます。

- ① 古墳の所在地を検索する
- ② 各種ハザード情報を確認する
- ③ リスクを整理して防災カルテに記録する



ハザードマップポータルサイト  
<https://disaportal.gsi.go.jp/>



## コラム02

### 「全国文化財総覧」への登録で得られる支援

奈良文化財研究所では、自治体が独自にデータベースを構築するのではなく、「全国文化財総覧」等の既存プラットフォームと連携することを推奨しています。

登録により、以下の支援を受けられます。

#### ① 発掘調査のデータバックアップと事務負担の軽減

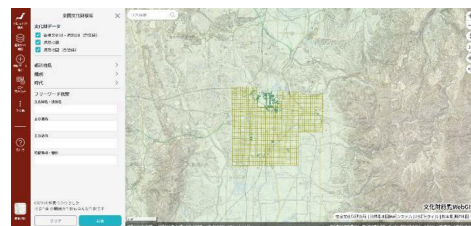
電子公開・データ登録は、庁舎被災時のバックアップになります。熊本地震では、事前登録のおかげで庁舎被災後も情報活用が途絶えませんでした。奈文研による書誌情報の一括登録支援も受けられます。

#### ② 災害リスクの自動抽出とプッシュ型支援

正確な位置情報（ポリゴン等）を登録しておく、災害時に国側（防災科研等）が被災可能性のある文化財を自動抽出し、担当者へプッシュ型で通知する仕組みが整備されつつあります。



全国文化財総覧  
<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja>



全国文化財総覧

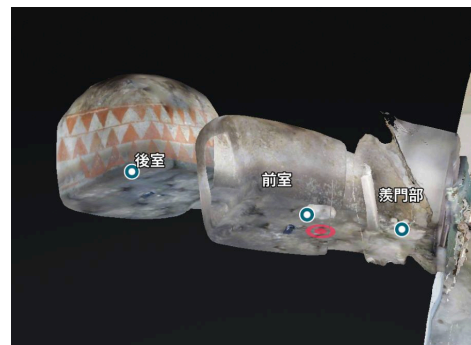


全国文化財総覧 WebGIS

## コラム03

### 3D計測とデジタルツインで「被災前の姿」を残す

有識者は、平常時に優先して収集すべき情報として、床面を含む石室全体の3次元データを重視しています。従来の図面や写真では記録に偏りがありましたが、石材の形状や積み方、奥行きに加え、背後構造まで把握・記録することで、被災前の正確な状態を残すことができます。こうしたデジタルツインは、被災後の損傷把握や復旧計画、経年変化の監視に活用でき、レーザー計測やフォトグラメトリによる3次元化のためにも、現況写真を多く撮影しておくことが重要です。



国指定 中田横穴（いわき市）